

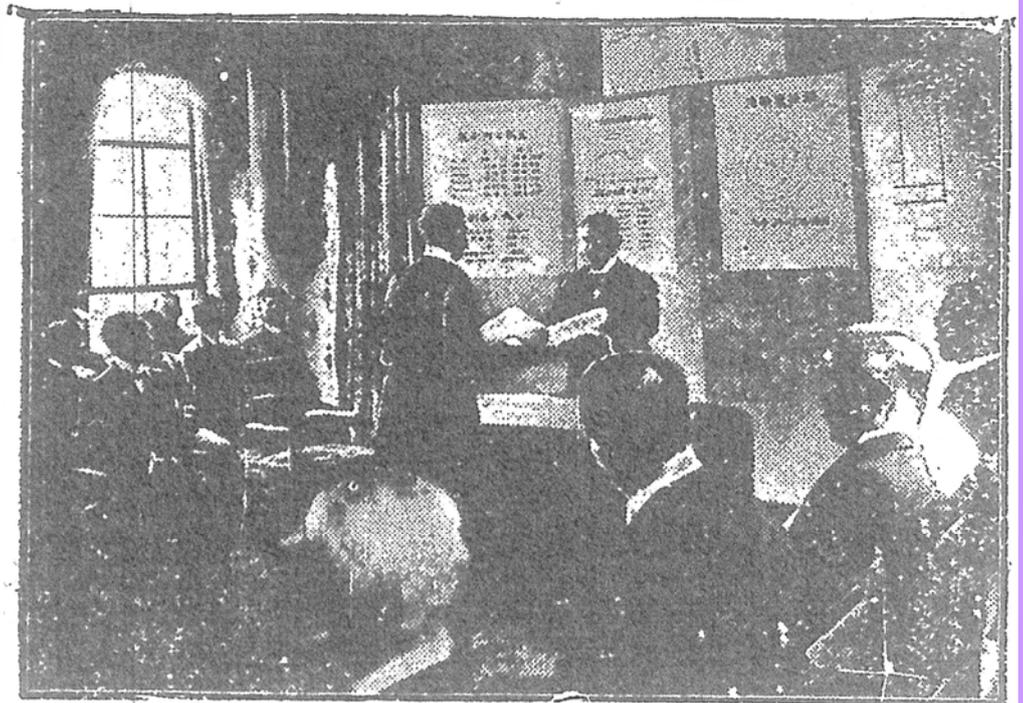


日本学士院ニューズレター

明六社だより

トピックス:

- 本院は、第100回授賞式を行います
- 平成22年度日本学士院賞が決定しました
- 第6回日本学士院学術奨励賞を授与しました
- 学びのススメシリーズ、若者向け講演会を実施しました
- 新会員6名を選定しました
- 春の公開講演会を京都で開催します



帝国学士院第1回授賞式

明治43年7月5日、皇室より賞典資の御沙汰があり、それを元に帝国学士院(現在の日本学士院)に授賞制度が設けられました。そして、明治44年7月1日、第1回授賞式が行われ、木村榮(ひさし)博士の「地軸変動の研究特に2項の発見」に対し、恩賜賞が授けられました。写真は、授賞式において菊池大麓帝国学士院長(右)より賞記を受け取る木村博士(左)の写真です(明治44年7月6日付け『日本』より)。以来、授賞式は1回の中断もなく毎年1回行われ、今年で第100回を迎えます。

(東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵写真より)

目次:

第100回を迎える授賞式	2	会員寄稿	12
平成22年度日本学士院賞	3	総会における論文報告・談話	13
第6回日本学士院学術奨励賞	6	外国アカデミー等との交流	13
講演会レポート	8	第52回公開講演会のお知らせ	14
第25回国際生物学賞授賞式	8	会館施設の利用案内	15
新会員選定	9	寄附のご案内	15
所蔵資料の紹介(姓名録)	10	会員・客員の逝去	16
		編集後記	16

第100回を迎える授賞式

—記念事業委員会を振り返って—

日本学士院第100回授賞式記念事業委員会が出発したのは平成20年秋でした。学士院幹事である私に、委員長として、100年に1回の貴重な会の企画、準備のために、委員の皆様の盛んな議論をとりまとめるようにとのことでありました。委員は、各分科より推薦を受けた7名の会員でした。委員会はほぼ毎月1回開催され、議論は自由、理想を追求しながら、実現的かつ建設的であったことを有り難く思いました。平成21年10月に第9回、平成22年2月に第10回委員会が行われ大綱をまとめましたが、もう一度、最終の会を行い、授賞式当日の人の動き、時間の余裕などを検証したいと思います。第6回委員会からは、久保正彰院長、古在由秀第2部部長がオブザーバーとして参加して下さり、第100回の意味するものの重さを久保院長に教えられました。

授賞式当日、授賞内容の天覧の間、久保院長が受賞者の説明にお立ち会いになります。その間、式場では、星野英一第1部部長による司会の下、古在由秀第2部部長が第1回受賞者の木村榮博士の「地軸変動の研究特にZ項の発見」について紹介されます。その後、受賞者が式場に入場、そして両陛下の御臨席の下、久保院長から100回記念

に関する挨拶があり、後は例年の如く厳粛な雰囲気の中、限られた時間ではありますが、記念授賞式を終える予定です。当初、授賞式やお祝いの会をホテルや大学等で行うという意見もありました。しかし日本国の現状に鑑み、学士院らしく、威厳があり且つ質素に、全てを1日以内に完了するという決断を、委員会として致しました。

授賞式100回を記念して、記念誌やDVDの製作、展示会を行うことになりました。第1回からこれまでの授賞題目や受賞者に関する記録のほか、20人の受賞者に会員がインタビューし、活字や映像で記録に残します。本院の歴史的視点、明治、大正、昭和を通じ戦時中も絶えることなく授賞を行い、昭和24年より天皇陛下、ついで平成に入ってから天皇皇后両陛下の御臨席を仰ぐ光栄に浴したこと、日本学士院創設時の理念、志等々を現代に可視化して後世に残します。

本院が長年にわたり積み重ねてきました授賞という事業は、冊子やDVDの形で、あるいは展示会で皆様のお目に触れることになるでしょう。ご覧いただき、ご理解いただくこととなれば、大変うれしく思います。

幹事 杉村 隆



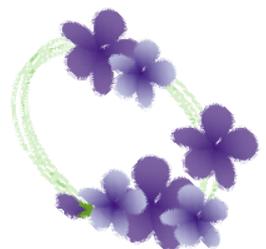
杉村 隆 会員
(幹事、第2部第7分科)

誌名の「明六社」とは…

明六社(めいろくしゃ)は、明治6年7月にアメリカから帰国した森有禮(もりありのり)が、後の東京学士会院会員となる福澤諭吉・加藤弘之・中村正直・西周(にしあまね)・津田真道・箕作秋坪・杉亨二らとともに啓蒙活動を目的として結成した、日本で最初の近代的啓蒙学術団体です。

名称の由来は明治6年結成からきており、毎月2回(1日と16日)に会合を開くほか、『明六雑誌』を発刊しました。また、我が国の公開講演会は明六社をもって嚆矢とされています。

その後、明六社は明六会となり、東京学士会院、帝国学士院を経て、日本学士院へと至る流れの先駆となっています。



平成22年度日本学士院賞

平成22年3月12日開催の第1037回総会において、平成22年度日本学士院賞の授賞が決定しました。第100回となる授賞式は6月に举行される予定です。



恩賜賞賜品
(御紋付銀花瓶)

恩賜賞・日本学士院賞

『能楽史の研究』

表 章

法政大学名誉教授

わが国の古典演劇として長い伝統を有する能楽が、祝禱的な舞中心の初期の段階から多くの人々が喜ぶ演劇的なものへと変化していった過程を、資料の綿密な分析によって解明し、能楽史研究を大きく推進した。



恩賜賞・日本学士院賞

「人工多能性幹細胞(iPS細胞)の樹立」

山中 伸弥

京都大学物質—細胞統合システム拠点iPS細胞研究センター長・再生医科学研究所教授

分化した細胞に3ないし4つの遺伝子を導入することで、ほぼ無限に増殖する能力と様々な組織や臓器の細胞を作り出す多能性を有する幹細胞、人工多能性幹細胞(iPS細胞)の樹立に成功し、再生医療のみでなく、今後の医学の発展に大きく貢献した。



日本学士院賞賞牌

日本学士院賞

『宋代司法制度研究』

梅原 郁

(財)黒川古文化研究所所長、京都大学名誉教授

唐朝の律令・三省六部の制がいったん有名無実となったのち、宋朝の手で内容を一新しつつ再組織された経過の研究である。官僚制度の実証を土台にして司法機構とその運営を逐一解明したもので、制度史研究上の重要な貢献である。



日本学士院エジンバラ公賞賞牌

日本学士院賞

『比較経済発展論—歴史的アプローチ—』

斎藤 修

ケンブリッジ大学リーヴァーヒューム客員教授、一橋大学名誉教授

経済学から離れつつある経済史学を、アダム・スミスの経済学に立ちかえり、経済学に引き戻そうとする野心的研究。先進国のみならず、途上国も射程に入れ、経済発展の多様性を論じた。





日本学士院賞

「ミトコンドリアと葉緑体の分裂・遺伝様式に関する基本機構の発見」

黒岩 常祥

立教大学大学院理学研究科特任教授・極限生命情報研究センター長、東京大学名誉教授

生体のエネルギー変換器であるミトコンドリアと葉緑体の増殖と遺伝の機構について研究し、これら細胞小器官が独自の分裂装置を使って分裂増殖することを発見、更にこれらの遺伝様式を特徴づける母性遺伝の機構を解明した。

昨年度(第99回)授賞式の様子



受賞者より説明を受けられる両陛下



日本学士院賞

「加速的宇宙膨張理論の研究」

佐藤 勝彦

明星大学理工学部客員教授、東京大学数物連携宇宙研究機構特任教授

宇宙は誕生直後、加速的急激な膨張を起こし、その直後の加熱によってビッグバン宇宙となったという理論を、世界に先駆けて提唱し、今日の素粒子的初期宇宙論の基礎を創った。



受賞者記念写真



日本学士院賞

「遷移金属分子触媒による有機化合物の骨格形成法と修飾法の開拓」(共同研究)

村井 眞二

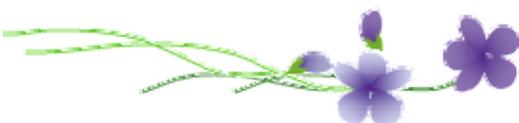
奈良先端科学技術大学院大学理事・副学長、大阪大学名誉教授

村橋 俊一

岡山理科大学客員教授、大阪大学名誉教授



遷移金属を含む分子触媒を設計することにより、有機化合物中の特定の炭素-水素結合の切断を反復して行い、従来困難であった化学反応を可能にした。社会的要請の高い省資源、環境低負荷型の化学プロセス開発へ貢献した。





賞状及び賞牌を授与される受賞者



授賞式後のパーティーで
会員と懇談する受賞者

日本学士院賞

「新規生物機能性分子の創製とその応用に関する研究」(共同研究)

大類 洋

横浜薬科大学薬学部教授、東北大学名誉教授

北原 武

帝京平成大学薬学部教授、北里大学客員教授、
東京大学名誉教授

不可能を可能にした超高感度不斉識別分析法の開発、汎用性のある高反応性ジエンの開発と環状化合物合成への応用、実用的殺虫剤、鉄キレーター、世界初の光学活性源としての糖質活用など、画期的な生物機能分子の創製に成功した。



日本学士院賞

「プロテアソーム(蛋白質分解酵素複合体)の構造と機能に関する研究」

田中 啓二

(財)東京都医学研究機構 東京都臨床医学総合研究所
所長代行・先端研究センター長

細胞内の蛋白質をエネルギー依存的に分解し、細胞の増殖・活性化などの各種機能の制御に関わる巨大な酵素複合体“プロテアソーム”を発見し、その構造・機能・病態に関する研究を包括的に推進した。



日本学士院エジンバラ公賞

「沖縄を中心とした我が国のサンゴ礁の形成と保全の研究」

西平 守孝

(財)海洋博覧会記念公園管理財団参与、東北大学名誉教授、
名桜大学名誉教授

共著で「日本の造礁サンゴ類」を著して研究を支え、サンゴ礁を中心に、多種共存機構として「棲み込み連鎖」理論を提案し、新たな群集観を示した。また市民も取り組めるサンゴ礁の保全の啓発活動を行った。



第6回日本学士院学術奨励賞

平成22年2月12日開催の第1036回総会において、第6回日本学士院学術奨励賞の受賞者6名が決定され、3月1日に授賞式が挙行されました。



「認知と学習の起源に関する比較認知心理学的研究」

川合 伸幸

名古屋大学大学院情報科学研究科 准教授

比較認知科学的な観点から、ザリガニからヒトまで系統発生的に大きく異なる動物の学習・記憶行動を実験的に研究し、人間の認知や学習の起源と特色を知るうえで、多くの成果をあげた。



受賞者に贈呈される賞状及び賞牌



「細胞の増殖・生死・分化運命を
制御するシグナル伝達機構の解明」

後藤 由季子

東京大学分子細胞生物学研究所 教授

増殖刺激により活性化するMAP kinase (MAPK) とその活性化因子MAP kinase kinase (MAPKK) を世界に先駆けて同定・精製、全長cDNAをクローニングし、MAPキナーゼカスケードの発見に大きく貢献した。

日本学士院学術奨励賞は、若手研究者を顕彰してその研究意欲を高め、今後の一層の研究を奨励することを目的として実施しています。

本賞の選考は、独立行政法人日本学術振興会の日本学術振興会賞受賞者を対象として行っています。



「匂いやフェロモンを感知する
嗅覚の分子メカニズムに関する研究」

東原 和成

東京大学大学院農学生命科学研究科 教授

細胞生物学、神経科学、ゲノム科学、さらには有機化学などの領域を融合した独自の手法を駆使し、動物が匂いやフェロモンなどの情報分子を感知する広い意味での嗅覚の多様な分子機構について、優れた独創的な業績をあげた。



秋篠宮同妃両殿下と記念写真



「普寂を中心とする日本近世仏教思想の研究」

西村 玲

財団法人東方研究会 研究員

近代日本思想史研究が、儒教と国学の政治思想を中心に展開し、また日本仏教史研究が上古と中世に傾斜している事実注目して、その不足を補うべく普寂を中心に近世日本仏教思想史の解明に努め、学問的に近代仏教の思想的先駆者として明示した。



式典全景

「カーボンナノチューブ合成の基礎と
用途開発への応用に関する研究」

畠 賢治

産業技術総合研究所
ナノチューブ応用研究センター 研究チーム長

CVD法を用いたカーボンナノチューブ合成において、スーパーグロース法と名付けられている高効率合成法を開発して、これにより、新しい学術領域が開拓されたのみならず、工業的な応用範囲を大きく広げた。



賞状及び賞牌を授与される受賞者

「調和バンドルの漸近挙動の研究」

望月 拓郎

京都大学数理解析研究所 准教授

調和バンドルの特異点での振る舞いの詳細な解析により、準射影多様体上の調和バンドルの理論をうちたて、さらに、この理論をもちいて平坦バンドルの「半単純性」に関する驚くべき結果を得るなど、数学全般に大きなインパクトを与える成果をあげた。



肩書きは授賞決定時(平成22年2月12日)

授賞理由等の詳細はホームページをご覧ください。 (<http://www.japan-acad.go.jp/>)

＜学術奨励賞受賞者寄稿＞

嗅覚は本当はすごい感覚だ

東京大学 東原 和成

匂いの感覚である嗅覚(きゅうかく)。身近にあるのに、よく「臭覚(しゅうかく)」と間違われるほど、普段意識していない感覚です。人間が生きるために必要な感覚ではないからでしょう。しかし、多くの生物は、外界からの化学信号(匂いやフェロモン)を鼻で感じて、食べ物、敵味方、異性を区別します。嗅覚は、生命の維持と存続に重要な感覚です。さらには匂いやフェロモンは生態環境をも支配しています。一方、私達も、料理を食べてうまい！と感じるとき、実

は半分以上の「おいしさ」が香りによるものです。つまり、嗅覚の研究は、「生命」「食」「環境」といった農学分野を広くカバーする学際的かつ分野融合領域です。

今回の奨励賞を励みに、今後、応用生命科学的な視点も持ちながら、嗅覚による生物間コミュニケーションの分子基盤を解明するとともに、大学研究教育に打ち込みたいと思っています。



講演会レポート

平成21年10月以降、本院主催による講演会、シンポジウム等を開催しましたが、その中から2つの講演会を取り上げ、レポートします。

1 第51回公開講演会

日時・場所 平成21年10月24日(日本学士院会館)

新開陽一会員が「金融危機後の米中経済調整」、須田立雄会員が「生物の進化と老化の観点から見た骨」と題して講演を行い、特に今回は関心の高いテーマであったことから、大変好評でした。

出席者は189名で、一般の方々のほか、専門家の方などの参加がありました。講演後の質問では、金融危機はなぜ起こったのか、インプラント治療についての質問など活発な質疑応答がなされました。

2 日本学士院特別講演会

学びのススメシリーズ「天文台の話」

日時・場所 平成21年12月12日(日本学士院会館)

本講演会は、将来における学術の発展を担うことが期待される小中高生に、学問への憧憬を抱かせることを目的として計画され、今回は第二弾となります。

講演者は古在由秀会員。東京大学理学部天文学科を卒業後、同大学天文台、スミソニアン、ハーバード大学各天文台で研究を重ね、人工衛星の軌道を割り出す「コザイの式」で一躍脚光を浴びた方です。その後、初代国立天文台長を経て、現在は群馬県立ぐんま天文台長を務める、まさに天文学の世界的権威とも言える存在です。古在会員は、昔から今に続く天文台の歴史と自身の経験を語るなかで、興味を持った物事に熱中して取り組むことのすばらしさ、また楽しさに触れ、子供たちの意欲を促しました。

今回は地元台東区内の小中高校生を対象に、47名の小中学生の参加がありました。普段は、日本を代表する大先生方が座る席に、まだまだ小柄な子供たちが座り、天文台や惑星のスライドを熱心に見て、講演を聴く様子は実にほほえましいものでした。

講演の後、子供たちからは、「土星にはなぜ輪があるのですか」などの質問が出され、古在会員は普段は専門用語で解説するところを、できるだけわかりやすく説明する工夫を加えつつ、応じていました。今後もこのような機会を作ることができればという思いがしました。



講演会場の様子



質問に答える須田会員



講演する古在会員

第25回国際生物学賞授賞式

平成21年11月30日に、国際生物学賞委員会主催による授賞式が本院を会場として挙行されました。

この賞は、昭和天皇の御在位60年と長年にわたる生物学の御研究を記念するとともに、本賞の発展に寄与されている今上天皇の長年にわたる魚類分類学(ハゼ類)の御研究を併せて記念し、生物学の奨励を図るものです。

今回の受賞者は、米国カーネギー研究所植物学部門名誉部門長のウインスロー・ラッセル・ブリッグス博士です。

授賞式は、天皇皇后両陛下ご臨席の下、落ち着いた雰囲気の中執り行われ、鳩山内閣総理大臣、川端文部科学大臣からそれぞれ祝辞が述べられ、引き続き地階食堂で行われた記念パーティーも含め、盛会のうちに終了しました。



授賞式風景

新会員選定

<会員はこうして選ばれます>

- 1月 官報公示
 学術機関、学会等からの会員推薦受付開始
- 3月 会員選考開始
- 約8ヵ月にわたり厳正な審査が行われます
- 12月 部会投票、総会承認を経て新会員選定



会員選定状授与の様子
 (平成21年12月21日)

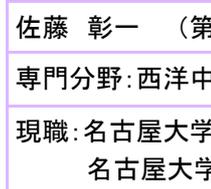
平成21年12月14日開催の第1034回総会において、日本学士院法第3条に基づき、次の7名を新たに日本学士院会員として選定しました。



川本 皓嗣 (第1部第1分科)

専門分野: 比較文学・比較文化

現職: 大手前大学学長、東京大学名誉教授



佐藤 彰一 (第1部第1分科)

専門分野: 西洋中世史

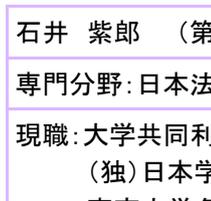
現職: 名古屋大学大学院文学研究科特任教授、
 名古屋大学名誉教授



塩川 徹也 (第1部第1分科)

専門分野: フランス文学

現職: 東京大学名誉教授



石井 紫郎 (第1部第2分科)

専門分野: 日本法制史

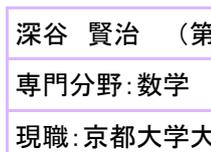
現職: 大学共同利用機関法人自然科学研究機構理事、
 (独)日本学術振興会学術システム研究センター相談役、
 東京大学名誉教授



石井 寛治 (第1部第3分科)

専門分野: 日本経済史

現職: 東京大学名誉教授



深谷 賢治 (第2部第4分科)

専門分野: 数学

現職: 京都大学大学院理学研究科教授



中西 重忠 (第2部第7分科)

専門分野: 分子神経科学

現職: (財)大阪バイオサイエンス研究所所長、京都大学名誉教授

選定理由等の詳細は
 ホームページをご覧ください。
 (<http://www.japan-acad.go.jp/>)

所蔵資料の紹介 (姓名録)

蘭学者・医学者…緒方洪庵

文化7年(1810)7月14日、備中の足守(現在の岡山県岡山市)で生まれる。洪庵の名は章、字は公裁、号は適々斎または華陰といった。幼名は田上駿之助で、元服して田上駿之助惟彰を名のる。

16歳のとき、父が大坂に新しくできた足守藩の蔵屋敷の留守居となったので、一緒に大坂へ出る。最初は武士を志すも、体が弱かったこともあり、大坂の蘭学医、中天游(1783-1835)の評判をきき、医者になる決心をし、文政9年(1826)、17歳のとき、天游の門に入る。このときから緒方三平と名のようになる。天游の塾にいた4年の間に、医学の翻訳書を読破し、これからは原書について学ぶ方がよいという天游の勧めもあり、22歳のとき江戸へ出て、蘭学医、坪井信道(1795-1848)の塾に入る。

本格的な蘭学、西洋医学の勉強はこの時期から始まり、オランダ語の力も大いにつき、4年の間に原書数十巻を読んて、多くの翻訳もしている。

天保7年(1836)、長崎へ2年間の蘭学修行。このときから名を洪庵と改める。

これで修行の時代は終わり、天保9年(1838)、大坂に出て瓦町で適々斎塾(適塾)を開く。このとき洪庵29歳、天游塾の先輩億川百記の娘八重と結婚する。天保14年(1843)塾生の増加に伴い、大坂過書町に町家を購入して移転し、洪庵はこれを機に入門帳を用意した。これが今回紹介する「適々斎塾姓名録」である。

「姓名録」には637名の名が残っており、原則、自署であるが、そうでないものもあり、同じ者が数名分を書いたところもある。

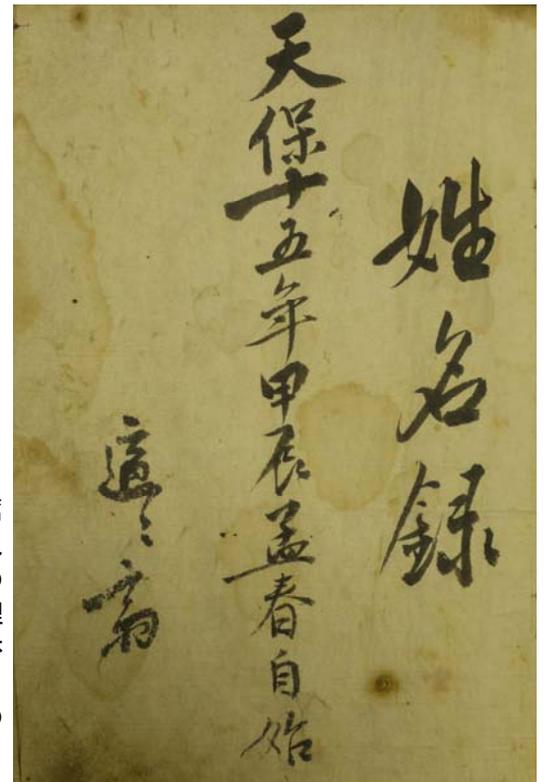
このコーナーでは、本院が所蔵する貴重図書・資料についてシリーズで紹介いたします。

第5回は天保9年(1838)、緒方洪庵によって大坂に開かれた蘭学塾(適塾)の入門帳「適々斎塾姓名録」です。

〈所蔵資料〉

- 一適々斎塾姓名録一 1冊
(昭和51年、緒方家より寄贈)
- 一緒方洪庵書簡一 71通
(昭和55年、緒方家より寄贈)
- 一箕作阮甫書簡一 21通
(昭和52年、緒方家より寄贈)

「適々斎塾姓名録」



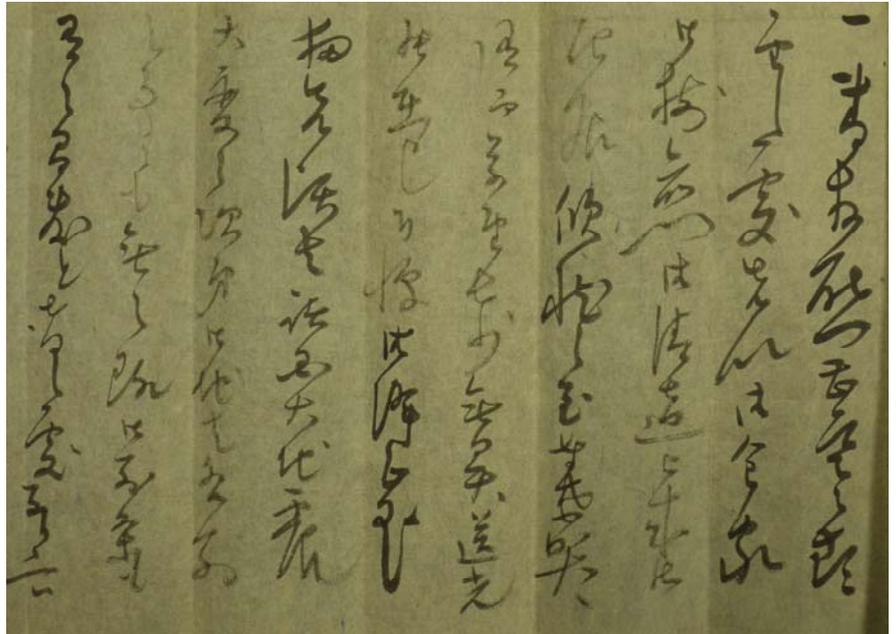
○洪庵の号「適々斎」

洪庵の号「適々斎」は、莊子太宰師篇にある句に暗示をうけたもので、「他人の役せられず、物に役せられず、己の適とするところを適とする」の意味に理解されており、いかなるものにも制肘されず、おのれの確信ある道をいく、自主独往の精神をみずから標榜したものと見える。



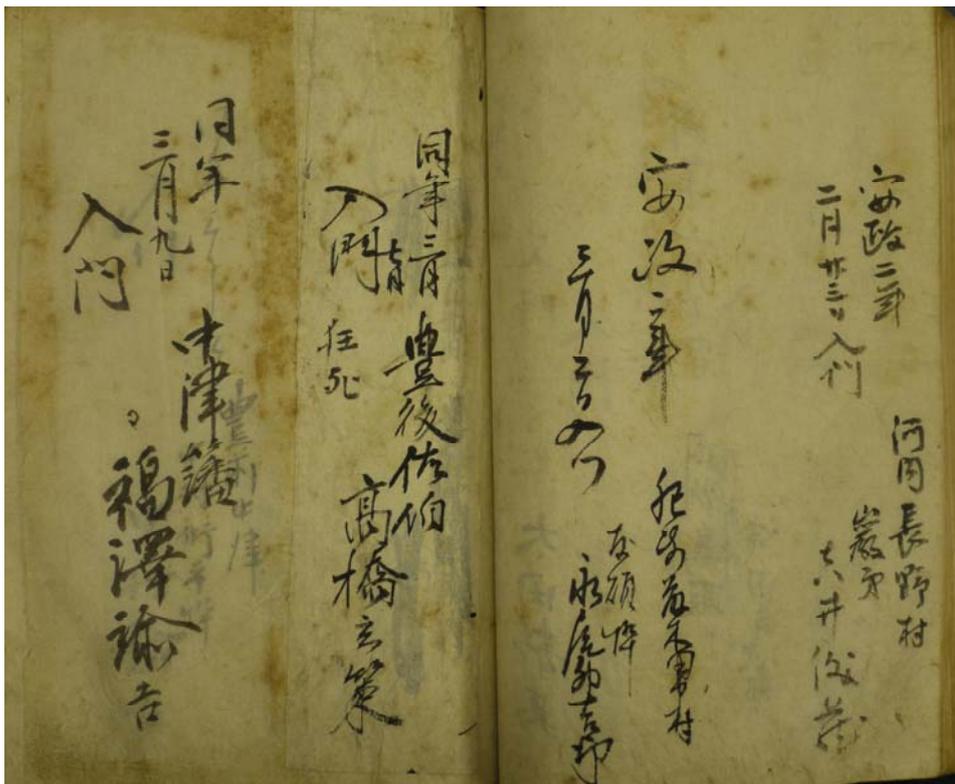
洪庵は、多くの塾生と一つ屋根の下で生活しながら蘭学を教え、医学者としては診療のためほとんど毎日往診に出かけた。また、『病学通論』三卷(嘉永2年(1849))、『虎狼痢治準』一卷(安政5年(1858))、ベルリン大学教授フーフェランド(1764-1836)の内科書本編(治療編)と処方編の翻訳『扶氏経験遺訓』(安政4年-文久元年(1857-61))などを著作、翻訳し、刊行するなど蘭学者・医学者として大きな足跡を残した。

そして、この塾で学んだ門下生からは、幕末から明治にかけて各方面で目覚ましい活躍をして、日本の近代化に大きな貢献を果たす者たちが数多く輩出された。



「緒方洪庵書簡」より、箕作秋坪宛(安政元年十二月十一日)。
相模、伊豆、駿河、遠江で起こった大地震、津波を心配する内容の手紙。

「適々齋塾姓名録」より、福澤諭吉署名箇所。



『学問のすすめ』などで広く知られ、本院の前身である東京学士会院の初代会長福澤諭吉。幕末の徳川幕府、政治の面において力を発揮した橋本左内。長州藩で兵学者として実力をみせ、明治新政府において兵制改革に乗り出す大村益次郎。戊辰戦争で幕府側について戦った村上代三郎。そして、五稜郭の戦いで、武田斐三郎の設計した五稜郭にこもって、最後の抵抗をみせた大鳥圭介、高松凌雲。日本赤十字社の初代社長、佐野常民。蘭医ポンペについて西洋医学を学び、医学教育の重要性を説いた長與専齋。福澤諭吉らとともに明六社に参加し、東京学士会院創設のメンバーでもある箕作秋坪。など…それぞれの分野で重要な役割を果たした人たちが数多くいる。

このように「姓名録」に見られる人物を眺めてみると、洪庵先生の志が、今日の学士院にも引き継がれているのかもしれない…。

(会員寄稿) ハイチから来た人々

ハイチで激震というニュースに、すぐ思い出したのは、2、30年まえにアメリカ東海岸のある町で(ボストンだったかも知れない)出会ったタクシー運転手のことだった。彼はハイチからの亡命者で、弁護士だといひ、パパ・ドク、ベビ・ドク(医師親子)とあだ名される独裁者の暴政について語った。健闘を期待し、わずかながらカンパもして別れたのだが、その後独裁政権は倒れて、スイス政府が差し押さえた独裁者の財産を、災害復興に使えないかが検討されているという。あの亡命弁護士は健在だろうか。

自国政府の迫害を避けて出国し、他国の保護を求めることを亡命という。亡命を実現するためには、まず自国政府が出国を容認しなければならないし、どこかの国の政府が受け入れてくれないといけない。海外旅行が日常化している今日の感覚からすればなんでもないことのようにだが、ベルリンの壁、ポーランド・ピープル、脱北の場合には出国は命がけだったし、政府は旅券の発給を拒否することで、出国を妨害することができる。普通旅券で出国できても旅券の期限が切れれば、不法滞在を続けるか亡命者としてその国の政府の保護を求めなければならない。亡命を受け入れる基準は、亡命希望者が自国でどのように迫害されているかということである。受入国の社会への影響ももちろん考慮されるだろう。日本は東アジア諸国のなかで相対的に享受している富と安定のために、しばしば亡命候補地となってきた。日本政府の審査基準は欧米に比べて厳しいといわれ、保守的な国家思想のせいだともいわれる。しかし振り返ってみると、日本は明治以来、インド、フィリピン、中国から何人も大物の亡命を受け入れてきた。特に中国近代化の先駆的思想家梁啓超を、戊戌の政変の混乱のなかから軍艦で日本に亡命させたのは、伊藤博文の離れ業であった。超法規的というより該当すべき法規がなかったのだろう。梁は10

年近い日本亡命中に、日本に移植されていた欧米近代思想を広く学習し、帰国してその普及に努めた。毛沢東もそれによって近代に目覚めた一人である。

しかし亡命者は、自国の体制に入れられないために、いわば敗者として国を出たのであり、もちろんそのすべてが逆転勝利をえたわけではない。はじめにあげたハイチの弁護士の場合は、独裁政権は倒れたのだから、彼は生きながらえていれば成功した亡命者として帰国しただろう。ところがバンクーバー・オリンピックは、帰国しないで成功したハイチ亡命者に照明を当てた。

オリンピックの開会宣言をしたのは、カナダの事実上の元首とされるミカエル・ジャン総督であったが、彼女は11歳のときハイチから来た亡命者であった。父親はおそらく、あの弁護士と同じ世代であったろう。移民にやさしい国といわれるカナダで成長していくうちに、彼女は新しい壁に直面した。それは祖国の独裁政権に反対する民主主義の闘士であるはずの父親の、家庭内暴力、男性支配であった。

学生時代から女性解放の思想と運動に参加してきたジャン総督の目には、オリンピック競技が、自由平等のアリーナと映じたことだろう。



水田 洋 会員
(第1部第3分科)

大正8年、東京都生まれ

東京商科大学卒業。名古屋大学法経学部助教授、経済学部教授を経て、昭和41年名古屋大学経済学部長。昭和58年名城大学商学部教授。名古屋大学名誉教授。

平成10年12月から日本学士院会員



総会における論文報告・談話

総会では、第1部(人文科学部門)は会員が論文を提出、第2部(自然科学部門)では会員の論文・談話とともに学術上優れた外部研究者の論文が紹介されます。以下は、最近提出された会員の論文・談話です。

総会	部	題 目	提出(担当)者
1032回		植物培養細胞からバイオサイエンスへの展開(合同談話会)	山田 康之
	第1部	シェイクスピアとカトリシズム	玉泉 八州男
1033回	第1部	近隣騒音問題と公害紛争処理 ドイツにおける高齢化問題	難波 精一郎 村上 淳一
	第2部	バルク金属ガラスの開発と工業化(談話)	井上 明久
1034回	第1部	火山噴火罹災地の文化・自然環境復元 司法制度改革と民事司法	青柳 正規 竹下 守夫
	第2部	レニン・アンジオテンシン研究の新局面:最近発見されたプロレニン・レニン受容体の糖尿性や高血圧性組織傷害における役割(談話)	稲上 正
1035回	第1部	会社を非公開にする 金融のグローバル化 —その功罪—	龍田 節 貝塚 啓明
	第2部	クラブ病と私:日本からの若き(若かりし)研究者と共に歩んだ道(談話)	鈴木 邦彦
1036回	第1部	仏陀の生涯より—誕生、入滅、結婚	原 實
		国際法の学者よりは実務家として過ごした60年	小田 滋
1037回	第1部	郷鎮から見る旧中国の都鄙関係	斯波 義信
		高田保馬博士と勢力説	根岸 隆
	第2部	宇宙空間における磁力線リコネクション(談話)	西田 篤弘

外国アカデミー等との交流

ロンドン王立協会を始め、9カ国10機関と交流協定を結び相互訪問等を実施するほか、海外の学術団体等との学術交流を促進しています。

区分・相手先	会員等氏名	期間
受入 国際学士院連合 常任理事会	Miklos Maroth 教授 Lise Hannestad 教授 Shaul Shaked 教授 Jean-Luc De Paepe 博士	21.10.21~10.25
	盧五鉉(Rho Oh-hyun) 教授 李正馥(Lee Jung-bock) 教授	22.1.25~1.28
大韓民国学術院		

第52回公開講演会のお知らせ

平成22年5月29日(土)、第52回公開講演会を大谷大学(京都市北区)において開催します。

上田閑照会員が「世界における「無の思想」—西田幾多郎、鈴木大拙、西谷啓治」、外村 彰会員が「電子で見るミクロの世界」というタイトルでそれぞれ講演を行います。

世界における「無の思想」—西田幾多郎、鈴木大拙、西谷啓治—

上田閑照

「有と無」は「考えながら生き、生きながら考える」私たち人間の思惟を導く根本語であるが、自覚的に「有」をその基礎範疇とする立場と「無」を基礎範疇とする立場が、世界思想史において際立った伝統を形成してきた。「有」を「有るもの」の究極の根拠とする立場は「無」を「非有」とし、その故に「有」に依存すると見る。それに対して、例えば「有は無より生ず」(老子)と見る立場にとっては「無」は「有に非ず、無に非ず」という高次の否定であり、限りない創造性を秘めている。二つの伝統の出会いからどのような意義を持つ新しい思索が生まれたか、西田、大拙、西谷三者の哲学に即して考察してみたい。

電子で見るミクロの世界

外村 彰

電子は、“粒子”であると同時に“波”としても振舞う。互いに相容れないこの2つの性質は、アインシュタインをはじめとする多くの科学者を悩ませ続けてきた。しかし、こうした理解し難い電子の振舞いも、最先端技術によって直接検証され、今や、自然科学の最も根本的な現象と見なされるに至った。我々は、レーザーのような“干渉性の良い電子線”を40年にわたって開発し続けてきたが、これにより、電子の波の性質が観察できるようになり、これまで見ることのできなかつた“ミクロの世界の不思議”を目のあたりに見ることが可能になった。この手法は物理学の基礎実験のみならず先端技術の極限的な計測手法として期待されている。

《開催日時》平成22年5月29日 午後1時30分～4時40分

《場 所》大谷大学響流館メディアホール

入場無料

必要事項を記入の上、下記まで事前にお申し込みください。定員(150名)を超えた場合でも別堂での聴講が可能です。

＜申込方法＞ 日本学士院ホームページから、または、FAX、往復ハガキ、E-mail

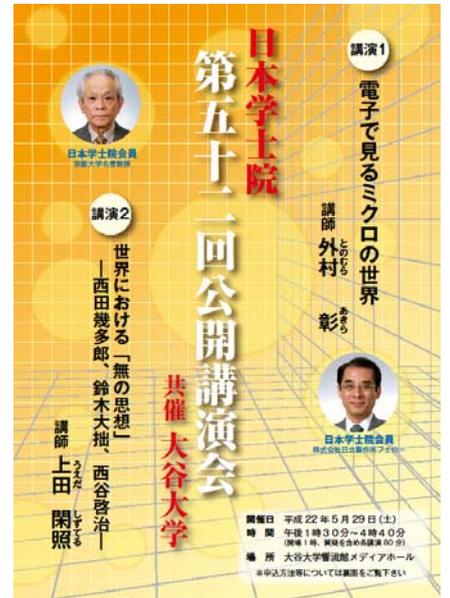
＜必要事項＞ 氏名(フリガナ)、住所、電話番号等連絡先

日本学士院公開講演会係 (〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32)

TEL: 03-3822-2101 FAX: 03-3822-2105

E-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp

http://www.japan-acad.go.jp/

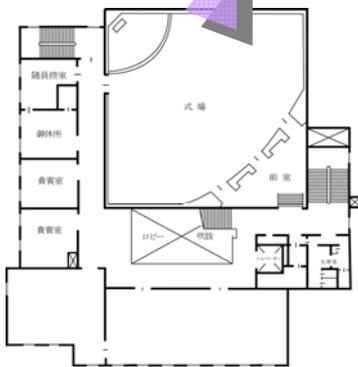


【会場案内図】

京都市営地下鉄京丸線「北大路」駅より徒歩1分、北門のすぐ目の前。

※車での来場はご遠慮ください。

会館施設の利用案内



建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小六つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、庶務係までお問い合わせください。

(平成21年10月以降の会館利用状況)

利用年月日	利用目的・内容
平成21年11月20日	第9回山崎貞一賞贈呈式
平成21年11月30日	第25回国際生物学賞授賞式
平成22年 3月 1日	第6回日本学術振興会賞・日本学士院学術奨励賞授賞式

寄附のご案内

民間企業、団体、個人等から広く寄附金を受け入れ、学術の振興に資する事業を実施しています。金額の多少にかかわらず趣旨に賛同される方々からのお申し出をお待ちしています。

なお、本院への寄附金は国に対する寄附金として、寄附者が個人の場合

は、所得より「寄附金控除」の適用を受け、法人の場合は、「寄附金損金算入」の特例が適用されます(関係法令:所得税法第37条第3項第1号)。

詳細については、会計係までお問い合わせください。

<平成21年度下半期受入実績>

受入年月	個人・団体名	金額
平成21年10月	細見 繁子氏	30,000円
平成22年 2月	財団法人原田積善会	300,000円

会員・客員の逝去

平成21年10月以降、以下の方々が逝去されました。

<会 員>

吉田 民人会員 (第1分科)	平成21年10月27日	享年78歳
宮澤 健一会員 (第3分科)	平成22年1月9日	享年84歳
林 忠四郎会員 (第4分科)	平成22年2月28日	享年89歳

<客 員>

Kim Tae Kil (金泰吉) 客員 (大韓民国)	平成21年5月30日	享年89歳
Izrail Moiseevich Gelfand 客員 (ロシア)	平成21年10月5日	享年96歳



シンボルマークの由来

『古事記』において「長鳴鳥(ながなきどり)」は、知恵の神である思金神(おもいかね)が天の岩屋戸を開くために鳴かせたと記され、黎明を告げる鳥として伝えられています。本院の恩賜賞(当時)と帝国学士院賞(現日本学士院賞)の賞牌をデザインした坪井正五郎会員は、長鳴鳥に自然界の物の性質を考え究め事に応じて用いるとの意を込め図案に用いました。それ故、本院では長鳴鳥をシンボルマークとしています。

編集後記

今回発行しました第5号のニュースレターでは、今年、第100回を迎える日本学士院賞受賞者の業績紹介や、3月1日に行われた第6回学術奨励賞に関する報告及び受賞者からの寄稿のほか、客員シンポジウム・公開講演会・小中高校生向け講演会の模様などをお伝えいたします。

ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より御礼申し上げます。

小中高校生向け講演会は、昨年(2019年)12月12日(土)本院において地元台東区内の小中高校生を対象に古在先生が講師をお引き受けくださり、「天文台の話」として、江戸時代に浅草に天文台があった話や天体観測に関する話などをしていただきました。参加者は50名弱でしたが子供たちから活発な質問や好評なアンケート結果をいただき、運営担当者としてホッとした次第です。

この講演会に先立ち、講演会への参加の呼びかけと日本学士院の紹介を兼ねて地元台東区の小・中・高校及び生涯学習センターを本院係長と分担して訪問しました。台東区内を歩くと浅草

橋には人形や花火の間屋街、かつば橋には食器・調理道具の商店街、稲荷町には仏壇・仏具の間屋街など様々な専門店街がありました。こういった賑やかな町並みが多いためか、各学校は防犯に気を遣っているようでした。また、各学校にお邪魔しますと、子供達が元気に挨拶してくれました。対応していただいた校長先生又は副校長先生は、新型インフルエンザの流行期でもあり、校長と教員の個別面談の時期とも重なり大変お忙しい様子でしたが、適切に対応していただくとともに、地元台東区の特徴を熱く語られる先生もいらっしゃって私も感激しました。ご後援いただいた台東区教育委員会におかれては、校園長会でアナウンスする機会を頂き感謝しております。

ご協力いただいた関係者の皆様には、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

(A)

◎お問い合わせ先

日本学士院

〒110-0007
東京都台東区上野公園7-32
電話: (03)3822-2101
FAX: (03)3822-2105
E-mail: jimuj@japan-acad.go.jp

ホームページもご覧ください。
<http://www.japan-acad.go.jp/>